

博士學位論文要約

論文題目：「平和記念」の造営と展示 1915-1964
—— 広島陳列館／資料館／公園の50年 ——
氏名：越前 俊也

要約：

●はじめに（課題設定）

本論が題目の冒頭に掲げる「平和記念」という熟語は、戦後日本で制定された法律に使われた用語に由来するものである。被爆によって廃墟と化した広島市に対する国の補助率の引き上げや国有財産の譲与を認めさせるその法律「広島平和記念都市建設法」に記されている「平和」とは戦争が行われていない状態を指す。広島におけるその日は事実上、原爆が投下された1945年8月6日であった。「平和記念」とはそれを後世に伝えることを意味している。したがって、同法の意味をその実態に即して書き下せば、「原爆投下により戦争継続が不可能となった日を歴史に刻む町を復興させるための法」という意味になる。GHQの統治下であり、主権がなかった国の官僚たちは、この法律を文言化するにあたり、戦争当事者両国の国民感情に配慮して、原爆や戦争という直接的文言を避けた。その結果行き着いた熟語が「平和記念」という言い回しになったわけである。

1949年5月に国会で可決され、同年8月6日に公布された同法により、広島市は中心部を流れる川に挟まれた中の島北部一帯を公園にする計画が可能となる。その競技設計において、丹下健三（1913～2005）らの建築家グループ案が選出された。同計画の最大の特徴は、中の島の対岸にあった旧広島県物産陳列館の廃墟を公園内の建物配置を左右相称に振り分ける南北の軸線の延長線上に据えたところにあった。被爆前に広島県産業奨励館に名称を変えていた旧陳列館は、丸屋根を冠していたことから被爆5年目あたりから原爆ドームと通称されるようになり、丹下らの公園計画が一先ずの完成を見た1955年のころには、被爆都市ヒロシマにおける「原爆犠牲者の象徴」と目されるようになっていたのである。

本論の目的は、以上のような経緯で立案、計画された「平和記念」の名を冠する広島市の二つの施設、すなわち広島平和記念公園と広島平和記念資料館が立案と計画の後、実際に造営と展示を重ねてゆく過程で、何を目指し、何をなしてきたかを検証することにある。というのも、そこでは、文頭で掲げた「平和記念」の意味するところとは一致しない動きが認められるからである。そしてその実態を明らかにすることを目指すものである。それに合わせて、丹下らの計画によって、「原爆犠牲者の象徴」と目されるようになった廃墟（＝原爆ドーム）が現地に住む人々にはどのような見え方をしていたのかを探っていく。そうすることによって、それは丹下が想定し、その後、広島以外の土地で広く受け入れられた「原爆犠牲者の象徴」という概念には治まりきらない受け止められ方がなされていたことを明らかにするものである。

●先行研究と本論の方法論

広島平和記念施設に関する研究にはすでに積年の蓄積がある。とりわけ、公園を中心としたその造営に関する研究は、設計者丹下の資料分析やその真意を探る考察が数多くの建築史家によってなされてきた。主なものとして、広島平和記念公園の建物配置の基本構成が第二次大戦中のコンペで丹下が提出した大東亜建設記念営造計画忠霊神域のそれと一致するという見解（井上章一、1987）や同公園と厳島神社の親近性に関する指摘（鈴木博之、1999）、あるいは、そこに丹下の〈場の記念碑性〉という特性を見出す見解（藤森照信、2003）を挙げることができる。しかしこれらの研究は、いずれも、この公園の特性を一人の建築家＝丹下の創意に還元し、それが一貫したものであるという前提のもとに論を進めるものであった。それに対し、広島建築史家石丸紀興は、同市の復興計画の成立過程や平和記念公園の計画対象区域が変わってきたことを長年にわたって精査してきた（石丸紀興、1987, 1988, 1989, 1990, 1996, 2002, 2007, 2012, 2014）。さらには、原爆ドームに焦点をあて、この建物の被爆前後の歴史をその設置者や設計者の立場のみならず、受容者である市民の目線をとおして分析した研究もなされている（穎原澄子、2016）。

一方、被爆資料の展示に関する研究は、平和記念資料館開館3年目に開催された広島復興大博覧会において、「原子力の夢」を推進する展示が「被爆の記憶」を甦らせる展示に接続したかたちで実施された事実を分析した社会学者の研究（福間良明、2012）があるのみで、被爆資料そのものの収集や展示に関する検証はなされてこなかった。造営に関する建築史的アプローチが先行し、展示に関する社会的アプローチが立ち遅れている現状がある。さらにいえば、この二系統の学問的アプローチは別々に行われ、広島市の「平和記念」施設を全体像として認識してこなかった。

本論は、こうした問題を解消するために、公園の造営に関しては、それを恒久的なものとして見なさず、都市空間に展開されたインスタレーションとして、それらが仮設であることを前提にして分析するものである。また、展示に関しては、資料の収集、公開を経て常設展示に至る過程を重視して、博物館資料論、展示論の立場からそこで展開された具体的なものに即して分析する。これら二つの基本方針にしたがうことによって、公園とそこに建てられた建築とその建物で展開された展示の三者を連関・連動しあう動態として捉え直すことが可能となる。この方法論により、本論は広島における平和を記念する公園と資料館の設置者と受容者が目指したものと実際にそこでなされたこと、さらにはその受け止められ方を明らかにしようとするものである。本論の内容は、先に挙げた石丸紀興、穎原澄子、福間良明らの先行研究に加え、原爆ドームの前身である広島県の産業振興施設に関する菊楽忍（1992, 2011）、杉本俊多（2013）、三宅拓也（2015）による建築史的研究に補助線を引く作業から始まった。そして本論では、そこにこれら建築史家や社会学者とは異なる以下の四つの視点を加えていくことによって、広島を中心部に造営された戦前の施設と戦後の施設は両者とも、変容し続けたところに共通点と継続性があることに読者の注意を促すものである。

異なる視点とは、第一に原爆ドームと今日呼ばれる廃墟が、広島県の産業振興施設として発議され業務停止にいたるまでの運営状況を分析することである（第1章）。二度の改名により、三つの名で呼ばれた施設は、その発議や改名の理由が日本の対外戦争と密接に関

係していた。そしてその業務内容も館名の改名に応じて変えてきた。こうした社会情勢に応じた館名変更や業務内容の変化は、後に平和記念資料館において繰り返されることになる(第5章)。本論が原爆ドームの前史を扱う理由は、被爆前の県立の産業振興施設と被爆後の市立の平和記念施設の間に断絶よりも継続性があることを主張するためである。

第二の視点は平和記念資料館の中身に関するものである(第2章)。この施設は原爆ドームとならんで公園計画の要であると同時に出発点であった。にもかかわらず、その成立事情や初期展示に関する研究がこれまでなされてこなかった。関係史料が不足していたためである。しかしながら、同館初代館長で地質学者の長岡省吾(1901~1973)が手許に残していた資料が2015年7月に遺族から資料館へ寄託される運びとなり、この領域に関する研究を進める端緒がつけられた。本論はこの資料に基づきながら、被爆資料の初期収集物の内容や平和記念資料館の開館前後の展示状況を明らかにする。

第三の異なる視点は、平和記念公園の設計変更に関するものである(第3章)。この点に特化した分析や指摘はこれまでなされてこなかった。しかしながら、彫刻家イサム・ノグチ(1904~1988)に着目すると、彼がそこで担った役割の大きさが明らかになる(第4章)。また、1964年に「慰霊碑」後方に設置された「平和の灯」という名の構造物が意味するものに注意を払った(第6章)。

最後に第四の視点として挙げるのは、原爆ドームに注がれた市民の眼差しである(第7章)。市井の画家や広島の高校生、そして後世の漫画家がそれを捉えたアングルや描写の仕方に焦点をあてることによって、彼らや彼女たちは、原爆ドームを決して「原爆犠牲者の象徴」とは見なしていなかったことを明らかにした。

●各章の要約

以上のような構成を踏まえ、各章の内容をここで改めて要約していくと次のようになる。

第1章は、平和記念施設造営前の状況を示すために、原爆ドームと呼ばれるようになった施設の機関としての歴史を振り返った。この街における産業近代化の拠点として設置された建物は共進会に始まる各種催事を催す施設であった。また、県内外の産業情報を収集、発信する機関としても機能した。そこで繰り返された催事を時系列にしたがい紐解くことによって、戦前の広島市民が求めた繁栄による「平和」像を再構築した。

第2章は、平和記念資料館開館前の長岡省吾の業績に焦点をあてた。地質学者としての長岡の満州時代の経歴に触れ、被爆資料の収集がその延長線上に始まっていたことに着目した。結果、1949年に中央公民館に設置された原爆参考資料陳列室とそれに続き翌年開館した原爆記念館において公開された被爆資料は鉱物を中心としたものとなる。ところが1954年の第五福竜丸事件を踏まえ、長岡の被爆資料に対する関心は人的被害を訴えるものへ広がってゆく。また、同年末、東京の日本赤十字社の本社講堂で開催された原爆をテーマにした展覧会の出品内容が翌年の平和記念資料館開館時の展示の基礎になった可能性を指摘した。

第3章では、丹下健三の「広島計画 1946-1953」を検討した。雑誌『新建築』1954年1月号に掲載された丹下自身によるその記述を手がかりに、その変化の過程を追った。そして、丹下による被爆都市復興計画の重点課題は、幹線道路の新設から都市のコアの創設へ

変わっていったことを明らかにした。

第4章においては、イサム・ノグチが広島のために手がけた「記念碑」は慶応義塾大学《萬葉舎》休憩室の設計と密接な関係にあることを指摘した。さらにノグチの広島の「記念碑」地上部の造形は「原爆想起」を念頭に制作されたという見解を示した。それに対し、その地下室は天窗から差し込む太陽光により「原爆想起」の空間にも「死歿者追悼」の空間にも成り得たことを指摘した。

第5章は1955年の平和記念資料館開館とその後の初期展示について検証した。この年の4月、平和記念都市計画を推進した浜井信三が市長選に落選する。その結果、資料館に関する条例の内容が消極的なものになる。また、開館翌年に同館で「原子力平和利用博覧会」を開催することが早々に決まる。さらに1958年の広島復興大博覧会に際し、同館は「原子力科学館」という名の展示館とされた。それに対し長岡が、強硬に「被爆の記憶」を留める展示を貫いたことを明らかにした。また、アラン・レネ監督の『ヒロシマ・モナムール』（1959年公開）に映る平和記念資料館内部の映像を分析することによって、長岡が常設展示を、専門家を対象としたものから一般向けに転換させたことを明らかにした。

第6章は平和記念公園の設計変更に焦点をあてた。1949年の当選案は、戦後民主主義の理念を反映させた「平和広場」をその計画の中心に据えていた。ところが、1952年の「慰霊碑」設置にともない、この広場と「慰霊碑」の間に段差ができる。さらに1957年にこの広場を分断する参道が出現したことによって、公園全体の民主主義的性格は損なわれた。そして、1964年に「慰霊碑」後方に設置された「平和の灯」を発案、実現した人物が立教大学に原子炉を導入した松下正寿（1901～1986）であったことに注目し、この時期に平和記念公園に「平和の灯」が設置されたのは、日本の原子力行政と連動するものであったという指摘を行った。

最終章となる第7章では、原爆ドームが、どのように受けとめられてきたかをウィーン美術史家アロイス・リーグル（Alois Riegl, 1858～1905）の用語にしたがい振り返った。1949年の当選案平面図において、丹下は原爆ドームを被爆前の損傷がない建物として製図した。またその屋根を、実際は楕円であるにもかかわらず正円で描いている。それは、丹下がそこに原爆の犠牲者よりもキリスト教の聖堂に仮託するものを見ていたからではないかという可能性を指摘した。また、それは、リーグルが「近代の記念碑崇拜（Der Modernen Denkmalkultus）」（1903）においていう、「意図された想起的価値（Der gewollte Erinnerungswert）」の付与に他ならないと判断した。次に被曝15年後、白血病を患い死亡した高校生・楳山ヒロ子が原爆ドームを「痛々しい産業奨励館」と日記に書いていたことに着目した。この記述が原爆ドーム存置運動の引き金になった理由は広島の人々がそこに被曝後生きる自らの姿を投影していた可能性を指摘した。最後に近年の漫画家こうの史代の作品「夕風の街」における原爆ドームの捉え方に着目した。彼女がこの廃墟を描くにあたり選んだ視点は平和記念公園の北に位置する原爆スラムからの眺めであった。またその描線は輪郭線を一切用いない、細く短く斜めに走る陰影描写によっていることに注目した。そこにはリーグルがいう「古さの価値（Der Alterwert）」を召還する働きがあることを指摘した。

●まとめ

広島「平和記念」の名が付く二つの公共施設は、建築史家の藤森照信がいう「丹下の〈場の記念碑性〉」によって高く評価されてきた。また、原爆ドームは、対岸の中の島中央に丹下が設計した「慰霊碑」をとおして遠望されることによって「原爆犠牲者の象徴」であるかのように語られてきた。ところが、本論が検証してきたように、このような見方や語りは、少なくとも1964年までは必ずしも定着していたわけではなく、広島市民に共有されていたものでもなかった。当選案の「平和広場」やノグチの記念碑がそうであったように、当初は「戦争が行われていない状態」を「記念」する方法には、様々な選択肢が用意されていた。ところが、1957年、「慰霊碑」前に参道が引かれ、「原子力の平和利用」を推奨する「展示」が実施される。そして、1964年に「平和の灯」が「造営」されたことにより状況は変わってしまった。これを境にこの地が記念碑的に示す「平和」の実態は、1915年の広島県物産陳列館開館以来、この街が求め続けてきた繁栄による「平和」に回帰していったのである。自らが属する共同体が高揚して行くという幻想がもたらす幸福感を支えとするものになっていったのである。